

令和6（2024）年度事業評価について (2024年4月から2025年3月)

令和6（2024）年度の外部評価員による事業評価は、次の通りであった。

1. 外部評価員（敬称略） 6名

小川 智紀	STスポット横浜 理事長
飯田 有抄（※1）	音楽評論家
菊池 麻維（※2）	元 日本芸能実演家団体協議会 実演芸術振興部
並木 さとみ	相模原市立博物館 館長
吉本 光宏	文化コモンズ研究所 代表・研究統括
ヲザキ 浩実	玉川大学芸術学部演劇・舞踊学科 教授

肩書は就任当時のもの

（※1）飯田氏は、令和6（2024）年9月1日より就任

（※2）菊池氏は、令和6（2024）年6月30日をもって退任

2. 評価方法

- 外部評価員が主催事業の実地見学を実施し、事業評価シート（個票）に個別事業の評価を記述。
- 年度を通した総合的な評価として、個別事業評価等を参考に事業評価シート（総合）に評価を記述。その書面評価に加えて、外部評価員と職員とが出席する「事業評価会議」を開催し、意見交換や議論の上、当該年度の事業評価を総括する。

3. 評価結果（概略）

- 個別事業評価数 (カッコ内は、令和5（2023）年度)

県民ホール	9事業	12シート	(10事業12シート)
芸術劇場	10事業	28シート	(11事業22シート)
音楽堂	7事業	8シート	(8事業9シート)
計（延べ）	26事業	48シート	(29事業43シート)

○事業評価会議

令和7（2025）年9月8日（月）出席評価員 5名出席

出席財団役員：専務理事、事務局長、県民ホール・芸術劇場総支配人、
芸術劇場支配人兼事業部長

出席財団職員：県民ホール支配人、音楽堂館長、事務局次長兼経営企画課長、
芸術劇場副支配人、県民ホール・音楽堂事業部長、
施設運営課長、事業課長、制作課長、舞台技術課長、
広報営業課長、企画調整課主幹、業務課課長補佐、事務局

4. 評価結果（外部評価概要）

(1) 芸術文化事業

<p>県民ホール</p> <p>個別の目標や施策</p>	<p>県民ホールは、昭和50年の開館当初から有数の大型文化施設・多目的ホールとして神奈川県の芸術文化振興を担ってきた。第4期指定管理期間でもその実績と使命を継承し、さらに財団の理念とミッションの方向性と軌を一にしながら、一柳慧芸術総監督と沼野雄司芸術参与の方針のもと、上質でバラエティ豊かな事業を展開してきたが、施設全体の老朽化により、令和7年4月より休館することが決定している。</p> <p>令和6年度は、「開館50周年記念イヤー」の冠を掲げ、1年を通して、50年間の感謝と未来への思いを繋げる事業を展開しながら、クライマックスである令和7年のラストデイ（3月31日）に向かっていく。</p> <p>具体的には、新しい総合芸術表現を追求・創作する「開館50周年記念オペラシリーズ」や、企画性の高い小ホールの室内楽公演、現代美術の企画展の創造発信に取組むほか、大ホール2,400席の大空間と舞台機構を生かしたオーケストラ公演や海外ダンスカンパニーによる世界水準の舞踊公演、オルガン・アドバイザーの監修のもと実施する多彩なオルガン・コンサート、ホールを街にひらくオープンシアターや、県域でのアウトリーチ型公演、県民参加の美術展などの実施などを通じて、県民と感動を分かち合い、ホールの価値を高める事業を行う。年度最後の3日間は50周年ファイナル・イベントを実施し、多くの県民と共に再会を願うひと時を過ごす。</p>
	<p>○開館50周年と休館直前イヤーが重なり、新聞等で情報を得る機会が多かった。県内最大の大ホールでは幅広いジャンルの公演を、小ホールでは音楽に付加価値のある演奏が行われ、更にはギャラリーからの発信もあった。一柳名譽芸術総監督が総合芸術としての県民ホールを強く打ち出し、神奈川の芸術の発信地であったと言える。</p> <p>○バレエ公演『くるみ割り人形』の約60分のハイライト版や、青島広志氏による舞台芸術講座により、年齢や関心の垣根を超えた集客を目指し、『ファンタスティック・ガラコンサート』やフィナーレコンサート「ありがとう神奈川県民ホール」により、長年ホールに愛着をもって通っていた聴衆への感謝のこもった賑やかな締めくくりを目指されたことが伝わった。</p> <p>○橋本愛氏を起用したシャリーノ作曲《ローエングリン》は、現代作品を幅広い層に訴える意味でも大きな取り組みだったと思う。『オルガンavecシアトル』公演も、ウエンツ瑛士の起用による真摯で上質な舞台づくりも強く印象に残るものとなった。</p> <p>単なるポピュラリティの獲得ではない、出演陣と聴衆の新しい接点とその地平を切り開かれていたと評価する。</p> <p>○数々の高品質且つ大規模作品や様々な観客を対象とした多彩な演目を、多くの団体や公立劇場と連携し祝祭感をもって上演し、年間を通して話題性</p>

を提供した結果、高い動員数があったのは大きな成果であったと言える。一方、細かなことではあるが、技術的なトラブルが散見された。県民ホールレベルでは許されないことであるので、今後も一つ一つの事業に対して丁寧に向き合っていただきたい。

芸術劇場	<p>芸術監督・長塚圭史のもと、年間を通じたプログラムや劇場広報を通じて、高い芸術性を担保しながら、専門人材、劇場設備・機構、劇場間ネットワーク、外部資金などのリソースを活用し、それらを積極的に育成・展開・活用する企画を立て、安定した事業運営を目指す。</p> <p>前年度に引き続き、劇場・財団のミッションを踏まえた多様なプログラムを提供する枠組みとして、4月～8月を「プレシーズン」、9月～3月を「メインシーズン」として2つに分け、活動にリズム感を持たせ、より県民に親しまれる劇場を目指す。</p> <p>4月～8月の「プレシーズン」は、ひらかれた劇場として県民の方々とつながることを目指し、舞台に触れる少ない方々に、劇場の存在を知っていただき、また観客となる体験を提供することを主眼として企画していく。</p> <p>9月～3月の「メインシーズン」には、毎年度テーマを掲げ、時代や劇場の動性を表現しながら、芸術監督演出作品をはじめ、そのテーマから想起される多彩な作品をプログラムする。</p> <p>令和6年度は、『某（なにがし）』をシーズンタイトルとして、多様な価値観、美意識、そして舞台芸術の悦びを県民に提供していく。</p>
○時間とプロセスをかけて企画するカイハツでうまれた『品川猿の告白』『ライカムで待っとく』や、数々の賞に輝いた『リヤ王の悲劇』をはじめとして、演目ごとに高い意識を持って制作に取り組んだ成果が花開きだした年度ではなかっただろうか。レパートリーの幅も広く許容範囲の広さを感じた。	<p>KAATは公共劇場がやるべきこと、あるいはやった方がいいと思うようなことをしっかりとやっている印象。</p>
○『ライカムで待っとく』を、舞台の現場となった沖縄で上演したことは、非常に高い成果を出した。	<p>このような神奈川と外部との連携・発信は劇場のプレゼンスを高め、価値を高める取組みであると思う。</p>
○韓国国立現代舞踊団との国際共同制作『黙れ、子宮』、日英の俳優・スタッフ協同による『品川猿の告白』は、「国際交流のモデルとなる事業」である。	<p>こうした流れを牽引する劇場の一つとして、演劇を通じた深く濃密な国際交流を目指し、今後も取組みに期待したい。</p>

- 『花と龍』は芝居小屋的な臨場感を優先した舞台設定ではあったが、『リヤ王の悲劇』同様ダイナミックな演出が為されていたので、もっと大きな客席でも耐えうる強度を持っていましたし、更なる話題性も呼べたはずである。ホールでの主催事業は、もう少し客席設定を多くしても良いのかもしれない。
- 例えば大型公演は民間のプロモーション業者をより積極的に登用するなど、宣伝手段について広報／営業部門と制作部門間で検討願いたい。
- 絶えず動的に、積極的な事業を打ち出す広報である一方で、事業の意義や、伝えたいメッセージが多く、深いほど、それを周知させることの難しさがあると思う。デザイン性や適切な情報量については、引き続き真摯に取組んでほしい。
- 共催のダンスフェスティバル公演で、イスラエル大使館が後援されていたことから、観客層の一部に文化的ボイコットへの協力を求める動きが出た。これに対してKAATは公演終了後、「あらゆる暴力、非人道的な行為に反対する立場に立った上で、紛争、衝突、戦争が起きているときこそ、直接あるいは間接の対話の機会をつくることが文化芸術の役割だ」とする館長名義の声明を発表した。このように、観客側からの問い合わせに対応し、公立文化施設のあり方を示したことには大きな意義があった。
- ステークホルダーに求める倫理的な水準をはじめ、市民が芸術文化活動に期待するものは近年大きく変化してきている。公的な存在であることを制限と捉えず、むしろ積極的に活用し、社会における芸術の意義を示してほしい。

音 楽 堂	個別の目標や施策	<p>令和6年度は開館 70 周年を迎える。これを機に、オリジナリティと上質性を兼ね備えたラインナップを用意し、同時に若い世代や地域にむけ、新しいジャンルの音楽、他ジャンルの芸術との協働も含めた発信に努め、室内楽ホールとしてのブランドの向上につなげていく。</p> <p>フラグシップとなる「音楽堂室内オペラ・プロジェクト」ではオペラ黎明期の音楽の蘇演（注1）では国内随一を誇る、濱田芳通主宰アントネッロによる初期バロックオペラの新演出上演を、兵庫県立芸術文化センターとの協働で実施する。同時に関連する教育普及プログラムを県域の施設などと連携して実施する。もう一つのフラグシップ「音楽堂ヘリテージ・コンサート」では、トップアーティスト同士のカップリングによる独自企画を主催で実現するほか、発信力のある共催公演を積極的に誘致し、音楽堂の音響と歴史性を活かし、世界レベルの音楽体験を提供する。</p> <p>地域の人々に向けてホールを開き、次世代を呼び込むことをめざす「子どもと大人の音楽堂」では、多言語・多文化家庭の子どもたちを主な対象とした＜子ども編＞と、30 代前後の若い感性で音楽堂全体を楽しむ企画＜大人編＞を開催する。</p>
-------------	----------	--

	<p>従来の表現・思考のスタイルにとらわれない新しい表現を紹介するシリーズ「新しい視点」では公募プログラム<紅葉坂プロジェクト>の発表公演と、次年度に向けた公募・審査などを実施し、創造に挑みつづける場としての音楽堂をアピールしていく。</p> <p>その他県民参加の「メサイア全曲演奏会」、また『先生のためのアウトリーチ』、「インターナシップ」、「紅葉ヶ丘まいらん」などの取組みで、次世代の人材育成や、地域に開かれ、音楽文化の振興をはかる公共ホールとしての役割を追求する。</p> <p>(注1) 長く演奏されていなかった作品を演奏すること。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ○年間を通して、長きにわたる音楽文化の厚みを伝える事業内容を打ち出している。また、琉球音楽やベルリンRIAS室内合唱団による合唱音楽を取り上げるなど、歴史の縦軸のみならず、体系的な横軸の視点も提示した公演が並び、豊かな音楽の土壌を感じさせる。実力派ピアニストの2台デュオや、2つの弦楽四重奏団の競演など、ホールの響きや規模感を活かした室内楽の取り組みもユニークで魅力的であり、近隣のみならず、首都圏のクラシックファンの好奇心を刺激する上質な公演を打ち出した。 ○杜のホールはしもとの多目的室で『オルフェオ』の事前WSに参加した。本番さながらの迫力があって十分楽しめたし、本番に期待が高まるものである。少し会場を変えて行ったことにより、敷居の高いオペラへの集客を誘う意味もあると思った。 クラシックの王道としての存在感は十分あるがそれ以外のジャンルについても様々な趣向を凝らした事業展開を行っており、県民の様々なニーズに答えようとしている姿勢が窺える。 ○近年、子どもや若年層に向けた取り組みが、多くの劇場で盛んに行われている中、『子どもと大人の音楽堂』シリーズでは、あえて「大人」も掲げ「ピクニック」というキャッチャーな形で打ち出されているのもユニーク。少子高齢化が進むなか、子どもたちへの眼差しも大切にされつつ、家族を持たない大人の層（とくに入門者層）もとりこぼすことなく、全世代にアプローチする企画に今後も期待したい。 ○「大人のための音楽堂『音楽堂のピクニック』」での、一般公募による100名のコーラス隊は、その場限りの「参加型プログラム」とは異なり、参加者同士の交流も生まれるだろうし、中・長期的にホールに関わる人々の輪を育成されたのではないか。 ○70周年記念事業として、公演だけにとどまらず、レクチャーや座談会を取り入れ、意見交流の場づくりをされた点は、来場者にとってもホールの存在や意義を捉え直す機会になったのではないか。 ○音楽ホールとしては1000人強で、近隣や首都圏の音楽ホールと比較しても規模としては大きいものではない。しかしながら日本初の（公立の）音楽専用ホールであり、また前川建築を大切に使い続けるというミッションと、音楽堂がこれまで築き上げてきた70年の実績を客観的に分析して、近隣の音楽ホールの事業と比較検討し、開館100周年を目指して、更なる発信に努めていただきたい。

(2) 施設維持管理運営事業

<p>県民ホール</p> <p>個別の目標や施策</p>	<p>首都圏有数の客席数を持つ大型文化施設として、どのような催しにも対応できるよう、また、年齢、性別、国籍、障がいなどにかかわらず、あらゆる人々が芸術文化に親しみ、様々な芸術文化活動に携われる、魅力的で快適な場となるよう、安定したサービスと技術的サポートを提供する。</p> <p>大ホールではポップス、演歌、乳幼児向け公演、小ホール・ギャラリーでは県民の文化活動の発表の場として各種コンクール、ピアノ・合唱発表会、絵画・写真展覧会などジャンルを限定せず幅広く利用に供する。また、吹奏楽コンクール、神奈川県美術展をはじめとした美術展など、幅広い年齢層の県民の文化活動発表の場として提供する。</p> <p>大ホールの規模の大きさと舞台機構を国内外の利用者・関係芸術団体に周知し、県民の鑑賞ニーズの高い公演、海外の一流オペラやバレエ公演、全国規模の学術会議等の誘致に努め、特例利用制度等を活用して利用促進を図る。</p> <p>自主事業と貸館事業の適切なバランスを図り、新型コロナウィルス感染症拡大前の稼働率に回復させることで、利用料収入の確保を目指す。</p> <p>神奈川県内文化施設の施設利用担当者を対象とする、専門性の高い人材育成講座を実施し、県内文化施設全体のレベルアップ、県民利用のサービス向上に寄与する。</p> <p>周辺施設の需要の変化に対応しながら、日々多くの県民が集う活気あるホール環境を維持する。</p> <p>窓口案内、会場案内、舞台技術、警備、中央監視、清掃等の各委託会社及びレストラン・喫茶と協力し、快適な劇場空間の維持と利用者サービスの向上に努める。</p> <p>県と連携をとりながら、老朽化した施設の適切な維持管理を行うとともに、バリアフリー・ユニバーサルデザインなど、県民サービスの観点から時代に即した施設整備を行っていく。</p> <p>施設老朽化に伴う今後の県民ホールのあり方検討については神奈川県に対して積極的に協力を続けていく。</p> <p>抽選会後の空き日は地元イベントなどに対し、積極的に営業活動を行い利用の促進を図る。</p> <p>利用者の利便性を図るため前年度より開始した会議室のWEB予約については、利用者にも特に大きな混乱なく理解をいただき実施を開始しているので、引き続き安定した運用を継続して行う。</p> <p>法令を遵守し、全ての利用者に公平公正で安全第一かつ安心感を提供できる運営を行う。令和7年1月17日、開館から50周年を迎えるにあたり、文化事業と呼応し、</p>
------------------------------	--

	<p>施設運営として、バナーなどの設置や、記念ロゴマークの作成と催し物宣材等への活用依頼など、利用者の方々、来館者の方々に様々な形で50周年とともに祝っていただく機運を高め、休館までに県民ホールの存在価値を高め、休館後も県民に深く記憶していただく取り組みを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○老朽化による設備の障害については、やむを得ない。予算上の厳しさはどこも同じで、事故につながるような大きな障害が起こることがないように十分注意を計る必要はある。 一方、長期使用とそのメンテナンスによって、どのような課題が見え、改善の可能性がありうるのか、ノウハウも含めて、これまでの運営で得られた認識を、未来に向けて継承していただきたい。 ○少額の利用料にキャッシュレスサービスを導入し、利用者の利便性を上げたことは評価したい。また、多様化する催し物の特性に合わせて、利用時間や南口玄関の開扉時間を柔軟に運用したり、業務用エレベーターを活用するなど、少しでも利便性をよくする努力が窺える。
--	--

芸 術 劇 場	個別の目標や施策	<p>開館から13年がたち、ミュージカルのロングラン公演の会場として、多彩な演劇公演が 上演される劇場として横浜に定着してきた。認知度の向上とともに比較的長期の利用が安定的に入るようになっていることから、引き続き専門劇場として運営・技術サービスを安定的に提供していく。</p> <p>会場案内、舞台技術、警備等の各委託会社と協力し、館全体で、劇場の安全と危機管理体制を整え、快適な劇場空間の維持と利用者サービスの向上に努める。</p> <p>電子部品等の更新時期を迎えてることから、県と連携をとりながら適切な更新工事等を実施していく。</p> <p>外国人・障がい者等の来館者対応として、鑑賞サポートの充実、ホームページの改善、職員研修などを順次計画的にハードとソフトの両面から進めていく。</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ○劇団四季のロングラン公演等によって、ホールが97.7%と高い利用率で利用料収入を保持している。また、宣伝効果をはじめ、まちの賑わいの創出にも一翼を担っていると思われる。 ○コロナ禍を経て、多くの来場者が安心して劇場に足を運べる環境づくりは、劇場内の清潔感はもちろん、ピクトグラムの増設といった親切で細やかな対応が「見える」形で示されていることにもあると思う。 ○施設の維持管理において、安心安全な施設運営は言うまでもないが、予防修繕の予算取りは厳しくとも事故は人命にかかわることもあるため、保守点検等を確実に行なうことは重要である。演劇の上演に欠かせない電送機器のメンテナンスに細やかに対応するのみならず、前衛的な未来感のある3Dツアーシステムを導入し、新しい技術に積極的に取組んでいる点も素晴らしい。

<p>音楽堂</p> <p>個別の目標や施策</p>	<p>令和6年11月に音楽堂は開館70年を迎える。平成30年から31年にかけて実施された大規模改修では空調設備等が一新されたが、舞台設備や客席等老朽化が著しい箇所も多々あり、職員の運用能力向上を図りつつ、施設の定期点検・保守を継続する。また設置者が定める長期修繕計画の課題洗い出しや見直しを働きかけていく。</p> <p>日本でも最も歴史ある公共音楽専門ホールとしての存在価値を周知し、その保存、運用について広くご理解いただき一助として、音楽堂へのオンライン小口寄付を開始し、施設長寿命化のための補修費用に充当する。建造物としての価値とコンサートホール（音楽）としての価値をさらに向上させていくことを基本方針とし、安心・安全な施設維持管理、魅力ある事業実施や人材育成に取り組む。</p> <p>利用対応については、利用者が安心感を持って利用できるよう親切丁寧な対応、社会情勢等の変化にも柔軟に運用できる体制を整え、安心・安全な施設運営を第一に考え、利用者・来館者の満足度向上を図る。</p> <p>定期的に開催し、人気を博している建築見学ツアーについては、引き続きボランティアグループbridgeと連携し定期的に実施する。あらゆる方に参加していただく見学ツアーを社会連携ポータル課との協働で引き続き継続し、プラッシュアップを図る。</p> <p>近隣の横浜能楽堂が長期修繕期間に入り令和8年まで休館するが、能楽堂も含めた県立図書館、青少年センター、横浜市民ギャラリーと紅葉ヶ丘地区活性化のため、5館連携事業「まいらん」を引き続き促進させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○県の文化財としての建築物の維持と現役の音楽ホールとしての運用を両立させることは非常に困難ではあるが、他にはない付加価値を積極的に発信につなげていただきたい。 ○入場者数の増加というのは大きな課題だとは思うが、第一優先にする必要はないと思う。公共館としては単なる利益の追求だけでない民間にできないユニークな企画が生まれている気がするし、神奈川県のより多くの人に、舞台芸術が根付くためのミッションを果たしていくべき。その一方で、クラシック分野に限らず、教育普及活動や人材育成事業等に参加されている若い利用者との関係を通して、新規開拓してはどうだろうか。 ○防犯カメラの問題など、建物の老朽化については、丁寧なチェック体制により、来場者・利用者が安心して足を運べるように、今後も努めていただきたい。
-----------------------------------	--

(3) 社会連携ポータル部門

社会連携ポータル部門	個別の目標や施策	①専門人材育成プログラム、②学校教育へのアプローチ（エデュケーションアプローチ）、③あらゆる人々が芸術文化に親しめることを目指すインクルーシブアプローチ、④地域との連携を強化する機能（県域ネットワークプログラム）の4つの柱を中心に、3館の特性を生かしながら、社会と芸術をつなぐ窓口として機能していく事業を展開していく。
		<ul style="list-style-type: none"> ○専門の部署を設置して、首都圏はもとより国内の公立ホール群の中でも、最も多角的且つ積極的な取り組みを行なっていると評価する。また、今日的な課題にいち早く取り組んでいる数々の人材育成やインクルーシブネスを含めた教育普及における先進事業は、今後とも他の公立劇場が参考とするべく引き続き積極的に取り組んでいただきたい。 <p><専門人材育成プログラム></p> <ul style="list-style-type: none"> ○教育機関と専門施設の連携は必須であると同時に、養成・確保及び職員の資質の向上について、芸術文化領域全体の課題となっていることも確かである。 ○国の文化審議会の文化施設部会では、「劇場、音楽堂等の事業の活性化のための取組に関する指針」の改定に向けて、施設の管理運営の人材とは別に、常に劇場にいる劇場専属の専門人材の必要性を求める声が強まっている。網羅的に取組むことは不可能であろうが、単館での取組み以上に、複数施設の管理者ができること、県下にある施設のリーダーとして求められていること、現在の職員の専門知識補充として必要なことを、さらに整理してほしい。 ○グリーンシアターワークショップは今年度からの新たな取組みだが、環境に配慮した視点を持つことにより、発生する手間と費用も少なくはないと考えられるため、ピンポイントでの試行となるのはやむを得ないことだと考える。 <p><学校教育へのアプローチ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○もっとも重要な点は、県内各地の教員とのネットワークを長い時間をかけて築くことであると考える。単発のワークショップの開催を行うことよりはむしろ、学習指導要領に準拠した形での実践の整理を県教委などと連携して行うなど、県立施設だからこそできる長期的な取組みを模索し、劇場や音楽堂で行われている公演などの連続性を再確認してほしい。 ○県内の教育現場の先生方に新たな知見を提供する『先生のためのアウトリーチ』も、音楽堂が育んできたノウハウを通して、音楽堂が教育現場にとってより身近で頼れる存在となるきっかけになるのではないだろうか。 ○長塚KAAT芸術監督による指針でもあり、県民ホール休館に伴う県内広域での事業展開は県民に広く上演芸術に触れてもらう好機と捉え、将来の創客も見越して取り組んでいただきたい。 <p><あらゆる人々が芸術文化に親しめることを目指すインクルーシブアプローチ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○着実な定着をしていると評価できる。全体環境を整えることと同時に、誰に来て欲しいのかを絞りこんで、関係団体と取組の検証を行うタイミングも計ったらしいのではないか。鑑賞サポートの提供体制が全国に広がりつ

- つあるタイミングであるからこそ、文化施設側も利用者側も納得できる解を探ってほしい。
- 鑑賞サポートはまだまだ多くの当事者たちに情報が届かず、ホールが身近な存在になるには長い道のりがあるかと推察するが、汎用性のないメニューでもあるのでスポット的に継続させることが利用促進に繋がることもあるのではないだろうか。美術館などの他分野の文化施設や民間団体の取り組みを取材研究され、当事者たちが暮らしの中で芸術に触れる選択肢が増えるよう、更なる継続的な活動及び専門的な機関としての発展的な構築を期待する。
- 鑑賞機会の少ない子どもたちを公演に招待する活動も重要である。様々な子育て施策と連携し、子育て世帯の鑑賞・体験機会の拡充を図ってほしい。

(4) 本部事業

県域の芸術文化財団への業務協力	個別の目標や施策	<p>公益財団法人鎌倉芸術文化振興財団は、令和4年から鎌倉市より鎌倉芸術館の指定管理者の指定を受けるにあたり、当財団に対して業務協力の依頼を行った。当財団は、この依頼を受けて、令和4年4月から、鎌倉芸術館に対する管理運営協力として、①管理運営における人員出向などの協力、②主催公演における企画制作作品の提供などを開始したところである。</p> <p>県域で活動する財団との業務協力は、県域における芸術文化の振興の一助となることから、第3年度目にあたる令和6年度も、引き続き鎌倉芸術館に対する管理運営協力をしていく。</p> <p>なお、業務協力の期間は、令和4年度から5年間を1期として、最大2期までを予定している。</p>
	○鎌倉市の外郭団体への業務協力は、財団の新機軸であろう。長期スパンでみると、市による鎌倉芸術館の指定管理者制度の運用が順調でなかったことは周知の事実である。市の文化施設運営を含めた文化政策全体への関与を行うという意識で挑み、県内の自治体への波及も想定して関わってほしい。	
芸術文化に関する情報の収集提供	個別の目標や施策	<p>当財団の主催事業のみならず、広く県内外で実施された芸術文化や文化施設の取組等を紹介することで、県民に芸術文化への理解をより深めて親しみを感じてもらう情報誌として「神奈川芸術プレス」を年2回（9月、3月（予定））発行する。</p> <p>公演・催物に関わることだけでなく、文化と社会の架け橋になるような特集テーマを設定し、人材育成、社会連携の取組など様々な観点から、紙の冊子ならではの読み応えのある記事を掲載していく。また読者アンケートを通して県民のニーズを盛り込めるよう取り組んでいく。冊子と同内容のウェブ版も引き続き運営し、冊子を手にとれない読者にも幅広く読んでもらえるよう認知度の向上に努める。</p>

	<p>○広報と宣伝は違う。こういうことを我々財団はやっていると県民に向けて広く理解を求める広報と、公演（興業）での集客を目指した宣伝は分けて考えて、集客しなければならない事業は、積極的に宣伝して良いと考える。</p> <p>○神奈川芸術プレスでは音楽、演劇、美術と財団の扱う幅広い芸術ジャンルをまとめて扱っている。こうした隣り合うジャンルに興味を持ってもらうアピールに力を注ぐとよい。</p> <p>○神奈川芸術プレス165号の県民ホール特集は、保存版ものであった。ネットでも閲覧できるので、普通に情報を得る目的に、紙媒体は必要ではなくなっているのではないかという考え方もある。一方、この時代に紙媒体をこだわって出し続けるという良さもあると思うので、それが読んでもほしい人に届いているか、という総合的なバランスを考えてやっていってほしい。SNS等を含め、ビジュアルに強く訴えるプラットフォームと併用しながら双方の良さを生かす等の展開を考えていってほしいと思う。</p>
チケットの運営 かながわ、かながわメンバ	<p>個別の目標や施策</p> <p>会費無料のインターネット会員制度「かながわメンバーズ（愛称KAme：カメ）」を運営し、メールマガジンによる公演案内やチケット発売情報の配信、会員先行チケット予約などのサービスを提供する。併せてチケット購買データを分析することで、会員ニーズに合わせた効率的かつ戦略的な情報提供とチケット販売促進を図る。また、会員情報を適切に管理し、情報の安全性を確保し、効率的な運営を行う。</p> <p>○サイバーインシデントという困難な状況の中でも、個人情報をしっかりと守りながら、柔軟に継続できたことは高く評価できる。</p>
資金調達活動	<p>個別の目標や施策</p> <p><文化庁等からの補助金・助成金の確保> 文化事業、広報活動及び人材育成等の充実を図るために、文化庁「劇場・音楽堂等機能強化推進事業」等の補助金、一般財団法人地域創造をはじめとした民間の助成財団等からの助成金の確保に積極的に努める。また、独立行政法人日本芸術文化振興会の調査・意見交換等を通して、文化事業の水準向上に繋げるとともに、同様に助成を受けている他劇場や関係機関等との連携を強化し、制度に関する情報収集を行っていく。</p> <p><賛助会員制度の運営及び各種寄付金の獲得> 現賛助会員に継続してご支援いただけるよう特典やあり方を検討するとともに、新規の会員獲得のため、法人、個人への働きかけも積極的に行う。来館者、一般の方々の賛助会員制度への認知・理解を深めるため、主催公演における募集チラシの折り込みやWebサイトの充実等の方策を実施する。</p> <p>オンライン寄付サービスを促進し、3館施設毎の寄付の窓口を設定することで寄付の使途をより明確にし、寄付者数の拡大を図る。</p> <p>寄付を受けた事業のレポートをHPに掲載するなど丁寧かつ積極的な情報発信を行い、また寄付者向けイベントの</p>

	<p>実施等、劇場と寄付者の関係を深める取組みによって継続した支援の獲得を目指す。</p> <p>その他特定の公演や事業に対して支援をいただく個別協賛金の働きかけ、遺贈寄付のより積極的な広報に努め、幅広い支援をいただけるよう、働きかけていく。</p>
	<p>○資金調達については積極的に行ない、特に公的補助金獲得については金額的にも結果を出している。但し、内訳を見ると施設間で差が出ているように見受けられる。KAATは成果が出ているが音楽堂は惜しいように感じられる。</p> <p>○施設や予算の規模の差はあるとは言え、事業費を潤沢に調達することは事業の質と規模の拡充に繋がり、即ち県民へ還元することにも繋がるのだから、館をまたいで情報共有や勉強会などをするなどして財団全体として対策を講じるべきではないだろうか。</p> <p>補助金、助成金獲得がうまくいかない、惜しかった、という局面があるならば、どのような方面から評価されるのか、専門外の人にも価値が伝わりやすい、インパクトのある申請をどう行うか、といった工夫も重要な仕事だ。またフィードバックの結果によって予算のバランスをどうしようといふことも考えてよいと思われる。</p> <p>○引き続き、文化庁の補助金等を獲得し、安定した財源確保につなげるとともに、今後は、県民ホール休館後の新しい体制に合わせた資金調達の工夫が必要になってくるだろう。</p>

(5) 令和6(2024)年度重点テーマ

来館者サービスへの取組み（第4期指定管理提案への対応）について

新型コロナウイルス禍を経た第4期指定管理の期間に、来館者サービスがどの程度果たされたかを、各館の事業・施設運営ごとに中間評価し、それを踏まえた上で、外部評価員から講評（助言、アドバイス）を得た。

<総論>

○第4期指定管理者の提案の中でこれを重点テーマの一つにしているからには、やはり来館者数が公立文化施設の重要な部分と思われる。その点とあわせ、しっかりとできること、できなかつたことを整理しながら引き続き取り組んでほしい。

○こうした自己評価を指定管理者、施設の側はしっかりとやっているが、設置団体である県の政策、あるいはその文化振興基本計画にどう生かされているか、その辺も注視していきたい。

<各施設>

1 県民ホール

○老朽化が進んで設備が非常に厳しい中でも、維持管理・運営をしっかりと行い、大きな事故もなく、休館を迎えることができたことは、職員の日々の努力の賜物である。

また、県民ホールのこれまで培ってきた実績、多くの方たちとの連携のもと、質の高い事業を上演した結果として、様々な賞の受賞がある。神奈川芸術プレスの県民ホール特集は、保存版ものの読み応えのある内容であった。

○県民ホールは、神奈川県公立文化施設協会の会長館である。昨今加盟しない施設が増えて、加盟館だけで解決できない課題が多くなってきていると推察する。加盟しているか否かにかかわらず、施設の維持管理機能に関する課題を情報交換するなど、県域の芸術文化をリードする存在として、新たな役割を期待したい。

2 芸術劇場

○バックステージツアーや、マルシェの実施、割引といった取組みは、近隣の方々や、劇場に関心のある人、観光客などにもアプローチしやすい入り口を用意されていると思う。こうした劇場を開く取組みだけで終わることなく、劇場内の事業にしっかりと関心を持っていただけるように取組んでほしい。

○県の施策拡充で託児サービスが充実したことは、利用者としても大変良かった。しかし劇場の来館者は様々だし、子どもを預ける場所を増やす施策に際限はない。本来は、劇場が子ども施策にどう寄与できるか、県との調整も含めて、判断できる状況をつくる方向に動いていただきたい。

○有観客での避難体験公演は現実性が増し、職員にとっては絶好の訓練であるし、観客側でも良い体験になったと思われる。

3 音楽堂

○貸館利用者に対しての専門的に寄り添う姿勢は、評価に値する。利用者の自律性を鍛えられるように、そしてアマチュア団体の活発化が、音楽堂の主催事業への関心へつながるように、今後も丁寧に進めていただきたい。

○ロビーでサインの展示やパンなどの物販を行い、クラシック以外のジャンルに興味がある方も楽しめるように工夫されていた。